



苦難の末に誕生した 大阪港

大阪港は慶応4年(1868年)に開港しました。その頃の港は安治川の川口から5キロさかのぼった場所にあり、波止場が築かれ多くの船でにぎわっていました。川口には運上所(税関)が設置され、周辺は外国商人のための居留地として整備されました。



安治川口付近(なにわの海の時空館蔵)

ハイカラな洋館が建ち並び、並木にユーカリやゴムの木が植えられるなどモダンな街並がひろがっていたそうです。クリーニング店やパン・牛乳の販売などはこの地から大阪に伝えられたといわれています。

しかし、川底が浅いため大型船が入港できないという欠点がありました。



昭和初期の築港(大阪歴史博物館蔵)

そこで大きな港をつくる工事が度々計画されますが、財政難などの理由でなかなか実現には至りませんでした。明治30年(1897年)、ついに大阪市は当時の市予算の30倍もの予算を計上し、築港工事に着手します。明治36年(1903年)には築港大棧橋が完成。同年に開通した市

電に乗ってたくさんの人が棧橋へ訪れました。大正5年(1916年)に一旦築港工事が中止されますが、第一次世界大戦後の景気の波にのり、大阪港付近は商工業都市として大きく発展します。昭和4年(1929年)にようやく築港事業第一次修築工事が完成し、続いて第二次修築工事に着手。しかし昭和9年(1934年)の室戸台風襲来によって、港湾機能のほとんどが破壊・機能停止に陥りました。なんとか復旧した大阪港は発展を続け、昭和13年(1938年)・昭和14年(1939年)には貨物取扱量等が日本最大となりました。まさに貿易港としての最盛期を迎えました。



昭和初期の天保山乗船場